



2021年11月26日発行

座光寺石原遺跡 発掘だより

第7号



石室全景

■ 調査成果と見学会

6月から実施しているナギジリ2号古墳の調査は、石室内や墳丘の掘削が進み、様々なことがわかってきました。

墳丘の盛土は後世の造成の影響で崩れていますが、直径約14mの円形古墳であったと推測されます。遺体を埋葬する部屋である石室は、墳丘の南側に入口を設ける横穴式石室で、長さ7m、幅2.1m、入口幅1.4m、高さ2mを測り、床面には石が敷かれていることが判明

しました。入口には閉塞石(へいそくせき: 入口を塞ぐための石)も残っており、墳丘の周囲には幅3mほどの周溝が巡らされています。現段階で周溝は東側部分しか確認できていませんが、今後の調査で西側にも痕跡が見つかるかもしれません。

11月15日には、座光寺公民館・歴史に学び地域をたずねる会・2000年浪漫的郷委員会主催の遺跡見学会が開催されました。16名の参加者が古墳や出土遺物の説明を熱心に聞いていました。なかには本古墳について子どもの頃に聞いた話を教えてくださる方や、調査が続いている間にもう一度見に来たいと言ってくださる参加者もあり、地元の方々の遺跡に対する関心の高さを感じることができました。



ナギジリ2号古墳見学



出土遺物説明

■ 発見された副葬品(ふくそうひん)

ナギジリ2号古墳では、これまでに須恵器や鉄鏃(てつそく)、鉄刀、耳環(じかん)とよばれる耳飾りが出土しています。これらは埋葬された人と共に納められた副葬品と考えられます。

横穴式石室は、入口の閉塞石をどかせば、後から別の人を埋葬することが可能です。これを追葬(ついそう)といいます。ナギジリ1号古墳では、出土した遺物の内容や年代から、少なくとも3回追葬がおこなわれたと考えられています。本古墳でも、最初の埋葬に伴うとみられる6世紀後半の土器のほか、8世紀前半(奈良時代)の土器も見つかっており、1号古墳と同じく追葬がおこなわれた可能性があります。

追葬する時は、先に埋葬されていた人の骨や副葬品を、石室の端に寄せたりして片付けてしまうのが一般的です。そのため、本古墳の石室の壁際や入口からも副葬品が発見されています。

■ 周辺の古墳

『下伊那史』には、ナギジリ2号古墳の下段の水田に存在したとされるナギジリ3号古墳や、その南東方向にあったといわれる石原古墳についても書かれています。しかし、残念ながら今回の調査範囲内ではどちらも確認されませんでした。長い年月の中で、今はもう消滅してしまったのかもしれませんが、失われていく古墳が数多くある中で、ナギジリ1号古墳や2号古墳は、私たちに古い時代のことを教えてくれる貴重な存在といえます。



3個重なって見つかった須恵器の杯(つき)



表面に金が残る耳環(じかん)

ナギジリ2号古墳の調査も、いよいよ大詰めです。最後までご協力よろしくお願いたします。



石室床面の石敷きの様子(東半分)



座光寺石原遺跡発掘だより 第7号
長野県埋蔵文化財センター飯田支所
〒395-0151 飯田市北方 297-5
TEL:0265-49-0736
<http://naganomaiun.or.jp/>
担当: 若林・伊藤